



● 巻頭エッセイ アクティブラーニングは教育のディスラプトか..... 1	● 授業の玉手箱 教育実習を経た学生の成長..... 4
● 第4回「英語の教え方教室」合宿・勉強会 in 若狭報告..... 2	● 書籍紹介『教育 変革への展望1「教育の再定義」』..... 4
・ 基調講演、グループ討論①「やってよかった言語活動とその評価」..... 2	● 第 44 回勉強会「英語の教え方教室」簡易報告..... 4
・ グループ討論②「指導上の工夫・悩み」..... 3	● 「勉強会」今後の予定..... 4

巻頭エッセイ アクティブラーニングは教育のディスラプトか

東條 加寿子

ディスラプトとは、破壊すること。シリコンバレー発といわれるこの概念は、会社組織内で事業を起こすよりも自分でスタートアップする方が簡単で合理的という起業環境の中で、新鋭の起業家によって立ち上げられた新規事業が、大企業などの既存事業の組織や常識を崩壊させる、すなわちディスラプトする、といったコンテキストで用いられます。辞書的意味は「破壊すること」ですが、これまでの組織や常識などを崩壊させることにポジティブな価値観を込めて「創造的破壊」と訳されることもあります。NHK「ニッポンのジレンマ」(2016年5月1日放送)では「ディスラプトって何だ?」と題して教育のディスラプトが取り上げられました。今、よりよい教育を求めらる中で、私たちは既存の教育を崩して新しい教育への転換を追求しようとしているのでしょうか。壊そうとしているのは何なのか、そして新たにどのような教育を構築しようとしているのか。番組の出演者が1975年以降生まれの若い論客ばかりであったこともあり、シャープな切り口の教育論は新鮮です。本小欄ではその切り口を用いて、来るべき学習指導要領改訂で掲げられている「アクティブラーニング」を教育の「ディスラプト」の観点から考察するものです。アクティブラーニングを切り札に、私たちは既存の教育の何を壊そうとしているのでしょうか。そして新たにどのような教育を構築しようとしているのでしょうか。

文部科学省中央教育審議会(2012)答申の中で、アクティブラーニングは「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学修法の総称」と定義されています。他に、Bonwell & Eison (1991)による「学生自身が活動し、その活動自体について思考するような取組のすべて」といった定義もあります。さまざまな定義から、アクティブラーニングは「能動的な学修の総称」であり、これによって、知識獲得型(知識偏重型)の教育、教員主導型の教育からの脱却を試みるものであると捉えることができます。冒頭で紹介した番組でも、ディスラプトのターゲットとして、教員が教えすぎる教育、わかりやすすぎる教育、自ら学ばない教育があげられ、「教員が教えないことが重要」との極論まで飛び出しています。

ここで、「知識」の観点から教育を整理すると、知識には大きく分けて一般的知識と専門的知識があると言えます。大学教育についていえば、一般的知識は主として大学1,2年で学び、専門知識は大学後半に学びます。さらに、専門知識を獲得するには、知識定着型の学修と問題解決型の学修があるといえます。理系では専門用語や専門知識・概念の獲得が学びを進めていくために不可欠なステップで

ある一方で、文系では社会問題についての議論など、初めから問題解決型の学びに取り組むことが可能で、アクティブラーニングは知識獲得型・問題解決型それぞれについて有効な教授法です。このように見ていくと、ディスラプトの論点は、教育を知識獲得・定着型から問題解決型に転換しなければならないといった短絡的なものではないことがわかります。情報社会の現代においては、情報を収集し、整理・理解し、自ら問題を解決する能力が重要ですが、このことが、体系的に基本的・専門的知識を獲得することの重要性とすり替えられているとすればあまりにも表面的な議論であると言わざるをえません。実際、知識の伝承は教育の最も大きな使命の一つです。知識という学びのコンテキストをもって初めて現代社会で主体的に学び、問題を解決していく力を育むことができることを見失ってはなりません。

アクティブラーニングがディスラプトするのは、知識の質量といった教育内容というよりはむしろ教育の方法に係るものと言えましょう。教育の方法がいくつかのパラダイムシフトを経てディスラプトされてきたことはこれまでに私たちが体験してきたところです。1960年代頃からの行動主義に基づく学習理論から1980年代頃の認知主義的学習理論へ、そして今、ヴィゴツキーの活動主義にもとづく学習理論が時代の価値観となっています。学習者は社会との関わりによって理解を深め知識を内在化するのであり、学習者と社会の最近接領域が学びの最適化領域であるとするヴィゴツキー理論と同じパラダイムの中で、アクティブラーニングは教育方法としてその妥当性を保証されています。

さて、アクティブラーニングの隆盛は、教育の現場にさまざまな影響をもたらしています。ましてディスラプトされるのが教員主導の教育方法ということであればなおさら、教員には抵抗感や困惑があり、ベテランであればあるほどその度合いは強いのかも知れません。『教育の方法』の著書のまえがきで佐藤は、教育の方法に関する問題は、誰もが体験してきたなじみのある問題であるとともに、体験にもとづく先入観や思い込みが新しい発見や認識を妨げる危険があると指摘しています。これまでにITCの導入等、様々な教育改革ビジョンが示されてきましたが、アクティブラーニングの推進はこれまで以上に教員の授業デザイン力に依存しており、新しい教育改革の成否は一人ひとりの教員にかかっていると言っても過言ではありません。ディスラプトの当事者となる教員の熟達は今求められています。

Bonwell, Charles C., & Eison, James A. (1991). Active Learning: Creating Excitement in the Classroom, Jossey-Bass
佐藤学 (2011) .『教育の方法』. 放送大学叢書.